

3章

問題

【1】

A.

解答

- (1) **a** but **b** as well as **c** not, as well
(2) **b** Every [Each] time
(3) **b** unless

解説

- (1) 「～ばかりでなく…も」の表し方には、
a not only [just ; merely ; simply ; alone] ～ but (also) …
b … as well as ～
c not merely ～ but … as well [too]
などがあるが、not only ～ but (also) … が not ～ but … (～でなくて…) の形だとわかっていれば、only 以外にも just, merely, simply, alone などでも使えることがわかるはず。
(2) 「S' が V' する度に、S は V する」の表し方には、
Every [Each] time S' + V', S + V.
Whenever S' + V', S + V
などがある。また、この文は She *never* coughed *without* feeling a good deal of pain. のように書き換えることもできる。
(3) 「～である。ただし、…の場合だけは(例外的に)～でない」という論理構造を表すのに、英語では「～ unless …」という形を用いる。なお、**b** の that 節の would, worked は仮定法ではなく、she *will* fail the exam unless she *works* hard の will, works が時制の一致を受けたもの。

B.

ポイント

接続詞 that はさまざまな意味で用いられる。それぞれの英文中で使用される that の用法を考えながら解いていくこと。

解答・解説

- (1) **d** 「私が直接出席できるようにこの会議の日程を変更してくれませんか。」
so that S may ～ (S が～するために) の so が省略されたもの。
(2) **a** 「その申し出を拒否したいということを明らかにせねばならない。」
○ make it clear that S V 「S V を明らかにする」
it は形式目的語で that 節が実質目的語となる。
b や **e** も入りそうであるが、他の小問を合わせて考えると、**a** が正解になる。
(3) **e** 「月がとても明るかったので懐中電灯を使わなくても彼の顔が見えた。」

so ~ that …構文。

- (4) b 「あの衝撃的な事件が昨年起きたのは、私達が今立っている場所だった。」

It was ~ that …の強調構文で、It was と that に挟まれた語句が強調される。

- (5) c 「よいカウンセラーを探す際には注意することが必要だ。」

that you be careful ~ は仮定法現在。つまり、‘必要・重要’の形容詞や‘提案・要求’の動詞の後に続くものとする。

【2】

ポイント

接続詞と言っても、等位接続詞と従位接続詞、順接や逆接、時や条件を表す接続詞など多種多様なものを学習してきたと思うが、ここでは、それらの知識を簡単に見直しておきたい。

解答・解説

- (1) if 「明日の朝彼は家にいるかどうか聞いてください。」

if (whether) S V で「S V かどうかということ」という名詞節をつくる。「もし～なら」という意味ではない（これは副詞節の場合である）。

- (2) that [because] 「彼の成功の理由は、あらゆる努力をしたということだ。」

本来、‘理由 (reason)’ が主語である以上、論理的に考えて (S = C とすると) 補語に because 節が来るのはおかしいとされていたが、最近では because 節を許容する傾向が強い。

- (3) Suppose 「もしあなたが10億円持っていたら、それで何をするつもりですか。」

If S V = Suppose S V = Supposing S V = Providing S V = Provided S V とされるが、仮定法の条件節としても使われるのは If S V と Suppose S V と Supposing S V のみ。また、Provide S V や Supposed S V という形は存在しないので注意。

- (4) before 「冷めないうちに食べてくださいよ。」

before S V は「S が V する前に」という意味から転じて「S が V しないうちに」と訳せる場合があるので注意。

- (5) that 「その女優が結婚したという知らせは本当のはずがない。」

○ the news that S V 「S V という知らせ」

この that は同格の接続詞。The actress got married. が完全な文になっていることに注意。

- (6) before 「彼はまもなく日本に来るでしょう。」

○ It will not be long before S V 「まもなく S V」

before S V の部分は「時・条件を表す副詞節」であるから現在時制になることに注意。

- (7) so that 「その傷がちゃんと癒えるように治療を続けなければなりません。」

文意を考えて、so that S may [can ; will] ~ (S が V するために、S が V するように) という目的の副詞節にする。

- (8) that 「彼女はたまたま家にいなかった。」

○ It (so) happens that SV. 「たまたま S が V のようなことが起こる。」

- (9) and 「彼女は皿を洗ってそれを乾かしました。」

dried them の them が指しているものを考えると the dishes しかない。つまり dried の主語は She と考えるべきである。

(10) but 「確かに彼は格好よいが、心優しいとは思いません。」

○ It is true ～, but … 「確かに～だがしかし…」

【3】

ポイント

等位接続詞は何と何をつなげているのかを常に考える態度が必要である。また、接続詞として転用される語句については出来る限り覚えてしまうこと。

解答・解説

(1) c 「母とは、最初の教師であり、また最も重要な教師であり続ける。」

等位接続詞の and が何と何を接続しているかを考える。is と remains をつなげている。remind は「～を思い出させる」という意味で不適。

○ remain C 「Cのままである」

(2) d 「もしミュンヘンでの乗り継ぎを厭わなければ今日の午後にウイーンに着くことができる。」

○ provided S V = if S V (【2】(3)の解説参照。)

○ as far as S V 「SがVする限り」《範囲を限定》

○ unless S V 「SがVでない限り」

○ A as well as B 「B同様にAも」

(3) d 「車を走らせようとした途端、エンジンがどこかおかしいことが分かった。」

○ the moment S V = as soon as S V 「SがVするや否や」

although や even if は文法的には入るが、意味から考えて「最も適当」ではない。however (しかしながら) は接続副詞と呼ばれ、単独で文をつなげることは出来ない。

(4) b 「ジェーンはかなり不正直だ。それゆえ、彼女の言うことには気をつけたほうがよい。」

意味を考えると順接でつなげるべきであるから therefore (それゆえ) を入れる。なお、本問の選択肢 (however や meanwhile など) はいずれも厳密には接続詞ではない (接続副詞と言われる)。この英文で接続詞の働きをしているのは ; (semicolon) である。

○ meanwhile 「その間に ; 他方では」

○ moreover 「さらに ; その上」

(5) d 「知っての通り、自分の面倒を見られない限り、他の誰かの面倒を見られるはずはない。」

文章の意味を考えると unless 以外はおかしい。

○ unless S V 「SがVしない限り」

(6) a 「『合理的な』や『驚かせるような』などの大半の形容詞は、それが修飾する名詞の性質や特徴という観点で段階づけられるが、他方、『死んだ』とか『完全な』といういくつかの形容詞は、そういう段階づけはできない。」

while (しかしながら ; 他方で) という接続詞に着目して解く。while の前後で対照的な事柄が述べられていることに気がつけばよい。なお、absolutely は副詞のため、この空

所には入らない。

- (7) c「あなたがた皆に加われたら大変嬉しいのですが、ただ時間が無いのです。」

単に that では意味が通らない。only には接続詞の用法があり, only (that) S V で「ただ (しかしながら), S V」という意味になるのは入試では盲点の1つ。

- (8) d「今やインターネットが必要不可欠なインフラとして機能しているので、ウェブのスペシャリストは、かつてないほど多くのことができる。」

○ now (that) S V「今やSはVなので、SがVする現在では」

なお、Once (that) S V (いったんSがVすれば) も入らないわけではないが、now に比べると、最も適当な選択肢とは言いがたい。

- (9) c「消費者が主にデザインで製品を選ぶ限り、よりよいデザインを求めた競争が続いていくだろう。」

as long as S V も as far as S V も「SがVする限り」と訳せるが、前者は‘条件 (SがVならば)’を表すのに対して、後者は「SがVする範囲内で」の意味になる。

cf. As far as the eye can see, there is nothing but snow.

(見渡す限り雪しかない。)

- (10) d「彼の能力が大変向上したので、どんなに困難であっても、彼自身で平易でスムーズにならないものはなくなっていた。」

so ~ that …構文の so greatly が文頭に出た形であることに気がつけばよい。

○ render O C「OをCの状態にする」

- (11) d「彼は7月に^{のうこうそく}脳梗塞を患って以来、リハビリを受けてきている。」

○ since S V「①SがVして以来 ②SはVなので」

○ in case S V「①もしSがVなら (= if S V) ②SがVするといけないので」

○ for fear (that) S V「SがVするといけないので」

○ undergo「～を経験する」

○ rehabilitation「リハビリ」

○ stroke「脳梗塞；脳卒中」

- (12) b「需要が高まるにしたがって、物価も上昇するだろう。」

according to + 名詞 (～によると、～にしたがって) はよく知られているが、according as S V (SがVするにしたがって) という形も覚えておく。

- (13) d「彼は刑務所から逃亡するや否や、再び逮捕された。」

(= As soon as he escaped from the prison, he was arrested again.)

これまでに何回も出てきた形である。

○ scarcely [hardly] ~ when [before] …「～するや否や…」

- (14) c「オリビアはジェイコブに涙を見られないように顔を背けた。」

○ lest (for fear) S should ~「Sが～するといけないので、Sが～しないように」

○ so that S V「《目的》SがVするために 《結果》そのためSがVする」

○ whether S V「《名詞節》SがVするかどうかということ 《副詞節》SがVであろうとなかろうと」

- (15) c「知ってる？ デイビッドは運転できないのに赤いスポーツカーを買ったんだって。」

even if S V と even though S V は異なる。even if は条件を強めて「仮に～だとしても」の意味だが、even though は譲歩を強めて「実際には～だけれども」という意味になる。本問では「実際に運転が出来ない」ことを強めているから後者を選ぶべき。

【4】

A.

全訳

第三世界としばしば呼ばれている貧しい国々が、適切な食料や住宅や医療の不足に苦しんでいる一方で、豊かな国々にも問題はある。豊かな国々は必ずしも住むのに大変快適な場所であるというわけではない。しばしばそれらの国々を豊かにしているものが、同時にそれらの国々を不快にする原因ともなっているのである。つまりそれらの国々を豊かにしている製品が、大気や水を汚染してもいるのである。ほとんどの人々はある程度の汚染は必然的で不可避なものと感じているので、これに我慢している。環境を汚染しないように、工場がその廃棄物を処理するよう要求している人もいる。

B.

全訳

日本に15分もいれば、自分が非常に礼儀正しい人々の中にいるということを確信するだろう。絶望的なほど混雑しすぎた島に住んでいる人々は、互いの私生活を尊重しなければならない——というよりは、日本人に少しでも私生活があるとしたら、そうしなければならないだろうと言った方がよいだろう。

C.

全訳

確かに第1次世界大戦のために女性が商工業に進出してきた。速記者、タイピスト、工場労働者、バスの車掌として、女性は社会でかなり新しい役割を果たし始め、引き返すことは不可能であった。なぜなら雇い主たちに大勢の安い労働力を提供したからである。今では女性は男性と同じくらい国の経済生活に貢献している。

D.

解答・解説

- (1) **f** than が直後にあることから、**f** less unusual, **h** rather, **i** stronger, **j** more unusual のうちから、文脈にふさわしいものを選ぶ。
less unusual は一種の二重否定で「変わったことではない」→「普通のことである」
- (2) **c** to 不定詞の意味上の主語を表す (for ～ to 不定詞が真主語で、文頭の It は形式主語であることに注意)。
- (3) **g** tens of thousands of ～ 「何万という～」
- (4) **n** take advantage of ～ to … 「～を利用して…する」
- (5) **i** (1) と同様に than が後に続くものの中から文脈に合うものを選ぶ。
- (6) **o** in spite of ～ 「～にもかかわらず」 = despite 「国籍の違いにもかかわらず」
- (7) **a** be worthy of ～ 「～に値する」
- (8) **m** on account of ～ 「～のために」《理由》 = because of ～

- (9) **b** as a whole 「全体として；概して」
 (10) **k** tend to *do* 「…する傾向がある」
 (11) **h** A rather than B 「BよりもむしろA」

A = the ways in which foreigners and Japanese differ

B = the possibilities of enriching one's life with friends from abroad

全訳

日本人が親しい外国人の友人を持つことは、20～30年前に比べればずっと珍しいことではなくなっている。何万人もの日本人が海外留学をしてきたし、また好機を利用して日本あるいは別の場所で出会った人々と友人になってきた人々もいる。場合によってはこういう友情が、日本で子供の頃や学校時代に育んだ友情よりも強いこともある。そして国籍の違いにも関わらず、これらの友人は愛情や寛大な気持ちや尊敬に値するとさえ感じる日本人もいるだろう。しかしながら、たいていの日本人はそのような友情を決して育むことはない。彼らはその違いのために外国人と友達になろうとすることさえ無駄であると確信しているようである。そして概して日本社会は、外国からの友人を持つことによって人生を豊かにする可能性よりもむしろ、日本人と外国人との違いを強調する傾向がある。

【5】

ポイント

長文読解において、1文1文を解釈していくことだけでなく、前後の流れを汲みとることも大切だということは言うまでもない。本問では特に後者に焦点を当てて問題を作成した。

解答

- (1) 「全訳」の下線部①参照。
 (2) **a**
 (3) 「全訳」の下線部③参照。
 (4) Racism (人種差別)
 (5) **b**
 (6) 黒人で世界チャンピオンとなったジョンソンを倒すことができる白人ボクサーのこと。(39字)
 (7) **d**
 (8) 1954年にボクシングの殿堂が設立された時、ジョンソンは人種の壁を超えて殿堂入りを果たしたが、次の黒人ボクサーがチャンピオンを争う機会が与えられるまで25年もかかったことから、当時の米国社会はまだ黒人の地位を認める段階にはなかったということ。(118字)

解説

- (1) to the fullest は「最大限に；精一杯」という意味の表現であるが、前後の内容からも、「史上最高のヘビー級ボクサー」であり「ジャズ・バンドでベースを演奏」し、「シカゴにナイトクラブを所有」し、「オペラや、シェイクスピアの『オセロ』を演じ」た彼の人生を読み取ればよい。
 (2) 「ジョンソンは、偉大なアスリートであり、何百万人ものファンがいたにもかかわらず」

- という逆接に続く箇所、勝利の後に、「黒人が白人を負かしたという理由で合衆国全土で死者が出る暴動が起きた」と続くことから、ジョンソンは『嫌われて』いたことになる。
- (3) keep to Aは「Aを外れない」という意味であるが、これも下線部より前の内容を考えて、「異人種間の試合は好まれなかった」ことから「黒人ボクサーは自分たちの集団内に収まっている必要があった」ことを読み取る。

e.g. keep to the right (右側を通行する)

- (4) 第1段落では黒人であるジョンソンが白人ボクサーに勝つと暴動が起こったことが、第2段落では異人種間の対戦が人気がない中でジョンソンが黒人初の世界チャンピオンになったことが書かれている。また、空所④に続く箇所では黒人のチャンピオンが白人に受け入れ難かったことが記されている。つまり、当時の状況は「人種差別が強い」ものだったとわかる。
- (5) 「ジョンソンを打ち負かせるボクサーがいなかったため、彼を打ち負かす他の手段を見つけた」とあることから、ボクシングのリング「外」の私生活について彼を攻撃した、と読み取ればよい。withoutでは「ボクシング(のリング)なしの生活」となってしまう、ジョンソンがボクシングから既に引退したような意味になってしまう。
- (6) “the great white hope”については第3段落に説明がある。It referred to any white boxer who could defeat Jack Johnson. を読み取ればよい。
- (7) ジョンソンは67歳までボクシング「を」続けたのである。～ and he continued it (= boxing) to the age of sixty-seven. と考えれば関係代名詞のwhichが正解とわかる。
- (8) 「ジョンソンが色の壁(=人種差別の壁)を打ち破ったものの、アメリカ自体はまだその準備(=人種の壁を打ち破る準備)が出来ていなかった」ということであるが、この理由はこの段落の前半に書いてあるため、当該段落全体の趣旨をまとめる形で答案化すればよい。

全訳

多くの人が、ジャック・ジョンソンは史上最高のヘビー級ボクサーであったという。ボクサーとしての48年のキャリアの間、彼は112試合を戦い、8試合しか負けなかった。①ジャック・ジョンソンは人生を目いっぱい生きた。自身のジャズ・バンドでベースを演奏し、シカゴにナイトクラブを所有し、オペラや、シェイクスピアの『オセロ』を演じた。だがジョンソンは、偉大なアスリートであり、何百万人ものファンがいたにもかかわらず、生前、アメリカで最も嫌われている男の一人でもあった。ある試合で彼が勝利した後、合衆国全土で起きた暴動で19人が死亡した。この暴力の原因となったのは、ジャック・ジョンソンが黒人であり、彼の対戦相手が白人であったことだった。

ジャック・ジョンソンは1878年、元奴隷の息子として、テキサスに生まれた。人生の早いうちに、ジャックは、努力して出世しようと決意した。最初の試合は1897年だった。その後の6年間、彼は黒人のボクサーとだけ対戦した。異人種間の試合は好まれなかったからである。③黒人のボクサーたちは、自分たちの仲間内から出ないようにしていなければならなかった。1903年、ジョンソンは、「ニグロ」ヘビー級のタイトルを勝ち取った。ジョンソンは、おもにトップクラスの黒人ボクサーたちと戦ったが、可能な時には、白人のボクサーとも対戦した。1908年、ジョンソンは、オーストラリアのトミー・バーンズからヘビー級

の世界チャンピオンの座を奪い、黒人初の世界チャンピオンとなった。

その後、一つのキャッチフレーズが生まれた。「偉大なる白人の希望」というものだ。それは、誰であれ、ジャック・ジョンソンを倒せそうな、白人のボクサーのことを指していた。当時アメリカでは、人種差別が非常に激しかったので、黒人の世界チャンピオンという考えは、多くの白人のアメリカ人には受け入れ難かったのである。かつてのチャンピオン、ジム・ジェフリーズは、白色人種のためにチャンピオンの座を取り戻すべく、1910年に復帰した。ジャックは15ラウンドで彼をノックアウトした。ジョンソンの勝利の後、アメリカ中で人種暴動が起き、その結果、19人が死亡したのである。

ジャック・ジョンソンを打ち負かせるボクサーは見つからなかったが、彼を打ち負かす別な方法が見つけられた。リング外での彼の生活は、彼の試合での技術と同じように、多くの白人を苛立たせていた。彼は、黒人だけでなく、白人の女性にも非常に人気があった。ジョンソンは、ある女性を不道德な目的のために州外に連れ出したとして逮捕された。その女性は、彼がのちに結婚した白人の女性だった。1913年5月13日、彼に1年と1日の服役が言い渡された。

ジョンソンは、黒人の野球チームの一員になりすましてカナダに逃れ、それからヨーロッパに移った。ジョンソンはヨーロッパで幸せに暮らし、そこでも注目を集め続けた。彼はボクシングを続けただけでなく、時間を見つけて舞台に出演したりレスリングの試合や闘牛に参加したりした。

アメリカは、ついに「偉大なる白人の希望」を見つけた。カンザスの農家出身で、ジェス・ウィラードという名の巨大な少年である。ウィラードは1915年、キューバはハバナでの有名な試合で、ジョンソンをノックアウトした。ジョンソンは1920年、合衆国に戻った。彼は即座に逮捕され、刑務所へ送られた。釈放されてから、彼はボクシングに復帰し、67歳になるまで続けた。彼は1946年、68歳で、事故により亡くなった。彼が愛して止まなかった、スピードの出る車のうちの1台を運転していた時だった。

ジャック・ジョンソンは、ボクシング界とアメリカ社会の双方に多大な影響を与えた。1954年にボクシングの殿堂が設立された時、ジョンソンは最初に認定されたボクサーとなった。次に黒人のボクサーがチャンピオンの座を狙う機会を許されるまでには、さらに25年かかった。ジャック・ジョンソンは肌の色の障壁を突き破ったが、アメリカはそれを受け入れる準備ができていなかったのである。

注

ℓ. 1 ◇ of all time 「史上」 all-time は形容詞で「空前の；史上最高」の意。

ℓ. 2 ◇ match 「試合」

ℓ. 3 ◇ to the full(est) 「十分に；心ゆくまで」

○ここでは最上級なので、さらにその意味が強まっている。

◇ own 「～を所有する」

○形容詞の場合は、所有格の後に来て、「自分自身の」（直前の his own jazz band 参照）。

ちなみに自動詞の場合は、「自白する；認める」という意味になるので注意。

e.g. own to be guilty （有罪を認める）

ℓ. 4 ◇ Shakespeare's *Othello* : シェイクスピア作の戯曲『オセロ』。主人公のオセロは、

肌の色の黒いムーア人である。

- ℓ. 6 ◇ break out 「(火事・戦争・暴動・病気などが) 突発する」
- ℓ. 7 ◇ across ～ 「～を横断して」 ⇒ 「～の全域で；～のいたる所に」
 - ◇ the reason for ～ 「～の理由」
- ℓ. 10 ◇ fight one's way 「戦いながら前進する；奮闘して進む」
- ℓ. 12 ◇ keep to ～ 「～（進路・場所など）から離れないでいる」
- ℓ. 16 ◇ arise 「現れる；起こる」
 - arise は不規則動詞で, arise – arose – arisen
- ℓ. 17 ◇ defeat 「～を打ち負かす；打倒する」
 - ◇ idea 「考え」
 - 日本語のアイデア（発想；思い付き）より広い意味で使われるので注意。
- ℓ. 19 ◇ come out of retirement 「復帰する」
 - out of は from と同じ意味。retirement 「引退」
 - ◇ reclaim 「～の返還を要求する；～を取り戻す」
- ℓ. 21 ◇ result in ～ 「結果として～となる」
 - 本文のように分詞構文での用例はよく見られる。
- ℓ. 23 ◇ bother 「～を悩ます〔うるさがらせる〕」
 - ◇ as much as ～ 「～と同じくらい」
- ℓ. 24 ◇ popular 「(大衆に) 人気がある；もてる」 (with / among)
 - ◇ as well as ～ 「～と同様に」
 - ◇ be arrested for ～ 「～のかどで逮捕される」
- ℓ. 25 ◇ immoral 「不道德な」
 - moral に否定を表す接頭辞 im- がついた形。
- ℓ. 26 ◇ be sentenced to ～ 「～を申し渡された；～の判決を下された」
- ℓ. 27 ◇ disguise as ～ 「～に見せかける；変装する」
- ℓ. 29 ◇ box 「ボクシングをする；なぐる」
 - 「箱」の意味だけでなく「なぐり合う」という動詞もある。
 - ◇ take part in ～ 「～に参加する」
- ℓ. 30 ◇ bull fight 「闘牛」
- ℓ. 34 ◇ release 「～を解放する；自由にする」
 - ◇ to the age of ～ 「～歳まで」
- ℓ. 35 ◇ die in ～ 「～（事故など）で死ぬ」
 - 病気, 老齢, 飢えなど, 死亡率の高い場合は概して die of ～, 外傷などが原因のときには die from ～ が使われる場合が多い。
 - ◇ at the age of ～ 「～歳で」
- ℓ. 37 ◇ impact 「影響；衝撃」
 - influence より「衝撃」の意味合いが強い。
- ℓ. 38 ◇ found 「設立する」
 - find の過去形と同型だが, この動詞の過去形・完了形は founded。

ℓ. 39 ◇ another twenty-five years 「さらに 25 年」

○ twenty-five years をひとまとまりの期間としてみなして another をつける。

◇ shot 「試み」 (= attempt)

e.g. at the first shot 「最初の試みで」

【6】

解答

(1) c

(2) c

(3) since

(4) but

(5) 「全訳」の下線部②, ③参照。

(6) as a watch makes when enveloped

解説

(1) bosom [bʊzəm]

a bomber [bɒmər]

b quay [ki:]

c wool [wʊl]

d guard [gɑːrd]

e dough [dóu]

(2) deepening = and deepened

分詞構文であるが、後に the terrors という名詞があるため他動詞を入れる。したがって自動詞である going / deteriorating / expiring は不適。この分詞構文の主語は主節の主語と共通であるから、expecting は不適。

(3) 初めの空所⑥に入る since は前置詞で ever since the first slight noise (最初のわずかな物音以来ずっと) となるが、次の空所⑦に入る since は副詞で ever since (それ以来ずっと) となる。

(4) nothing but A = but A = only A となる。最初の空所の but は except (～を除いて) の意味であるが、次の空所の but は only の意味である。最初の空所の後に it is only a mouse crossing the floor や It is merely a cricket という表現が続くことから予想できる。

(5) どちらも It is ～ that (which) … の構文だが、③はいわゆる強調構文であり caused の主語である the mournful influence を強調している一方で、②は強調構文ではなく、it は the first slight noise を指す指示代名詞であり which は cricket を先行詞とする関係代名詞である。

(6) such A as B = A such as B であり、when の後には it is が省略されている。この as は関係代名詞として用いられ、such a sound as a watch makes when it is enveloped (← a sound which a watch makes when it is enveloped) と書き換えられる。such a watch as makes と考えると、such a watch という名詞が前後とつながらなくなる。

全訳

まもなく、かすかなうめき声が聞こえてきました。そしてその声は死への恐怖から出たうめき声だということがわかりました。苦痛や苦悩からのうめき声ではありません。全く違います。それは、恐怖で圧倒された時、魂の底から発生する息を押し殺した低い音でした。私

はこの音をよく知っていました。夜になるとしょっちゅう、世界が寝静まったちょうど真夜中に、その音は私の胸から沸き上がってきて、恐ろしいこだまとなって、恐怖心を深め、私を取り乱したのです。本当にそれをよく知っていたのです。私は老人が何を思っているかも知っていました。だから内心ではほくそ笑んでいたものの、老人を哀れに思いました。最初にかすかな音を耳にして、ベッドの中で寝返りを打って以来、ずっと目を覚まして横になっていたことも分かっていました。それ以来ずっと、老人の恐怖心はどんどん大きくなっていったのです。彼は偶然のいたずらだと考えようとしたのですが、できませんでした。それで自分にこう言い聞かせていたのです。「今の音は煙突に風が吹き込んだだけにすぎない。床をネズミが横切っただけだろう。」とか、「②今の音はちょっと鳴いたコオロギにすぎないだろう。」と。そうなのです。その老人はこんな想像で自分を慰めていたのです。けれども彼にはそれがすべて無駄であると分かりました。何をしても無駄なのです。というのも死神が老人に近づいて黒い影と共に忍び寄り、老人を影の中に包み込んでしまったのです。③老人には見えも聞こえもしなかったけれど、その部屋の中に私が頭を入れていると老人に感じさせていたのは、姿の見えないこの影が与える不気味な力だったのです。

老人がベッドで横になる音を聞くこともなく、ずいぶん長い時間じっと辛抱して待っていた時、私は、少しだけ、本当にほんの少しだけ手提げランプの覆いを開けてやろうと決心しました。そして覆いを外しました。どれくらいひっそりと、ひっそりと外したかは想像できないでしょう。そしてついに、蜘蛛の糸のような一筋のほんやりした光が、外した覆いの隙間から漏れて、あのハゲワシのような目の上に完全に注がれたのです。

目は開かれていました。大きくぱちりと見開かれていました。その目を見つめていると、激しい怒りを感じてきました。私には老人の目がはっきりと見えました。まさしく骨の髄まで凍り付かせた、恐ろしい膜のはった淡い青色の眼全てが見えました。けれども私には老人の顔も体も見えませんでした。というのはまるで本能的にそうしたかのように、私は正確にあの忌まわしい眼へと光を向けていたからです。

あなたが私が狂っていると勘違いしているのは、単に神経がひどく過敏であるだけだと先ほど話しました。今度は低く、鈍い、威勢の良い音が聞こえてきたのです。綿でくるまれた時計が出すような音です。この音も私はよく知っていました。それは老人の心臓の鼓動でした。太鼓の音が兵士を奮い立たせるように、その音は私の怒りを煽ったのです。

【7】

解答・解説

- (1) Lungs are to the body what leaves are to the tree.
○ A is to B what C is to D. 「AとBとの関係はCとDとの関係と同じである。」
- (2) It began to thunder and, what was worse, I found that I had left my umbrella in the restaurant.
○ what is worse 「さらに悪いことに」
cf. what is more important (さらに大切なことには)
- (3) Who that knows Mayu can ever hate her?
疑問詞 who を先行詞とする場合、関係詞は that になるのが通常。

- (4) She is not what you suppose her to be.
 ○ what S be 「現在の S の状態」
- (5) In those days, we were leading what you call a hand-to-mouth life [existence] .
 ○ what you call = what we call = what is called 「いわゆる」
 ○ hand-to-mouth 「その日暮らしの」
- (6) What with joy and (what with) shame, her face turned brilliant red.
 ○ what with A and (what with) B 「A やら B やらで」《原因》
 ○ what by A and (what by) B 「A やら B やらで」《手段》
- (7) Five hours went by like so many minutes.
 ○ like so many ~ 「まるで (同数の) ~ のように」
Ex. I made five mistakes in as many lines. (5 行で 5 個のミスをした。)

【8】

A.

解答・解説

- (1) failed
 ○ 「(物・事・人) がいざという時に～の役に立たない；～を失望させる；～を見捨てる」
 の意の fail。
Ex. My tongue failed me. (言葉がどうしても出なかった。)
- (2) smells
 ○ smell C (形容詞) 「～の匂いがする」
- (3) makes ; difference
 < make a difference 「相違を生じる；影響する；重要である」
 = It matters little to me
- (4) owe
 ○ owe 「① (人に金銭上の) 借りがある ② (人に～のことで) 恩恵を受けている」
- (5) come
 ○ How come ~ ? = Why ~ ? 「どうして…か」
- (6) make
 ○ make it 「①うまく行く ②間に合う ③都合がつく」
- (7) do ; long
 ○ 「間に合う；役に立つ；ちょうどよい」の意の do。
 ○ so [as] long as … 「①…する間は《時》 ②…さえすれば《条件》」

B.

解答・解説

- (1) (b) bear (c) borne (d) born
 (a) 「彼は肩に重い荷物を背負っていた。」《過去》
 (b) 「この布地は洗濯できない。」《原形》
 ○ bear …ing 「…することができる；…する必要がある」

意味上 …ing は主語を目的語にしていることに注意。

(c) 「あなたに悪意を抱いたことはない。」《過去分詞》

○ 「(恨み, 愛憎を) 心に抱く」

○ malice 「悪意」

(d) 「彼は 1967 年にアバディーンで生まれた。」《過去分詞》

○ 「生まれた」の意味を表す場合, 後に by ~ が続く時は borne, それ以外は born を用いる。

(2) (b) deny (c) denied (d) denial

(a) 「その事実を否定しても無駄である。」《動名詞》

○ it [there] is no use …ing 「…しても無駄である」

(b) 「彼は息子に彼らの提案を拒ませた。」《原形》

have O do 「O に…させる [してもらう]」

cf. have O done 「O を…される [してもらう]」

(c) 「彼女はそれは事実ではないと言ったし, 他の人々もまたそうであった。」《過去》

'so + 助動詞 + S' 「S もまた…である」

○ did で受けていることから, 主節の動詞は過去形。

(d) 「私は彼にきっぱりと断りの返事をした。」《名詞》

○ give a flat denial 「きっぱりと断る」

(3) (b) satisfying (c) satisfied (d) satisfaction

(a) 「この絵にはみんなが満足するだろう。」《原形》

(b) 「その本の内容は満足のいくものだった。」《現在分詞》

○ 「人を満足させるような」satisfying, satisfactory

(c) 「彼女はその結果に満足したようだった。」《過去分詞》

○ 「人が満足して」satisfied

(d) 「あなたの仕事には満足させられます。」《名詞》

(4) (b) bored (c) boring (d) boredom

(a) 「彼のつまらない話には君もきつとうんざりするだろう。」《原形》

○ bore 「～を退屈させる」

(b) 「私はそのゲームに完全に退屈した。」《過去分詞》

○ be bored 「退屈する」

(c) 「彼らはその本をとて退屈だと思った。」《現在分詞》

○ 「人を退屈させるような」→ boring

(d) 「彼女は単調で退屈な生活に落胆しているようだ。」《名詞形》

【9】

解答・解説

(1) b

○ 女性に関する一般論であるから, married → marries または gets married とする。

○ start は不定詞・動名詞いずれも伴うことが可能。

「女性は結婚するとミセスという肩書を持ち、夫の名字を使い始めることが多い。」

(2) c

○ want to know では「(自分が結婚しているかどうか)を知りたくない」という意味になってしまう。want others to know ならば「他人に知られたくない」となり可。

「ミズという肩書は、1970年代に、既婚かどうかを知られたくない女性が使い始め、それ以来広く使われてきた。」

(3) c

○ depends は depending として分詞構文にすべき。

「イギリスでは5歳から16歳の子供は全員学校に行かなければならない。アメリカでは、6歳から14歳または16歳（子供の住んでいる州による）の間は学校に行かなければならない。」

(4) b

○ listened his “fireside chats” は listened to his “fireside chats” とすべき。

「フランクリン・デラノ・ルーズベルトは人気が高く敬愛された大統領で、多くの人々がラジオにおける彼の『炉辺談話』に耳を傾けた。その中で彼は、国内で起きていることや彼が行っていることについて、人々に語った。彼はテレビに出演した初めての大統領であった。」

(5) a

○ do not make の主語は having a lot of money 「金をたくさん持っていること」。動名詞句は単数扱いであるから、do は does とすべき。

「多くの上流階級の人々は金持ちで大地主であるかもしれないが、大金を持つことによって上流階級になれるのではない。特定の家系出身であること、ふさわしい友人を持つこと、ある種の私立学校に通ったということ、正しいアクセントで話すことなども重要である。」